

ぼくの 戦争と平和

●
本明広志



ぼくの 戦争と平和

本明広志



ぼくの戦争と平和

昭和六十一年十二月二十日発行 頒価二千円

著者 本明広志

奈良市登美丘五丁目一六

制作 朝日カルチャーセンター

大阪市北区中之島三二一四

朝日新聞ビル

目次

幼い日々	5
中田島	9
お月見どろぼう	14
特高	19
国民学校	23
大東亜戦争	31
松下屋敷	42
田舎の生活体験	50
けんか	59
ドッジボール	62
がき大将	64
ぜいたくは敵だ	75
修身と国史	84
大和魂	94
転進	103
防空演習と防空壕	113
東海大地震	122
初空襲	130

学校全壊	135
焼け野が原	142
疎開	149
UFOと機銃掃射	162
本土決戦	167
艦砲射撃	176
敗戦	180
食糧難	188
食糧難Ⅱ	199
やみ石けん	205
民主主義	213
日本国憲法	224
東京裁判	234
文化国家	244
読書	254
マラソン	259
野宿	266
あとかき	276

装
幀

倉
本

修

幼い日々

幼い時のシーンがぼんやりと脳裏に浮かぶのだが、それが本当にあったことなのか、夢の中のことなのかはつきりしない。

そんな中ではつきりと覚えているのは、母に連れられて新築中の家を見に行った時のことだ。雨戸が閉めてあったらしく、薄暗く戸の隙間から光がさしこんでいた。家の中にかんな屑がいっぱい散らかっていた。

裏木戸から外に出ると、そこは田んぼで小さな用水路があった。中を覗くとメダカや小さな魚が群れをなして泳いでいた。水の上を歩くあめんぼや、ものすごい速さで円を描くみずすましの奇妙な行動を、田の畔に座っていつまでも眺めていた。鰻のしらす、めせろが首を出して流れてきた、蛇だと思って身をひいた。とんぼも沢山いた。しおから、むぎわらはもちろん、オンジョ、メイトウと呼ばれた銀やんま、真つ黒な黒とんぼ、小さい可愛い蚊とんぼ、糸とんぼなど種類も豊富だった。

N町に引越したのは、僕が小学校に入る前の年の九月のことだから、満五歳の夏のことだろう。溺れそうになった記憶がある。砂浜からほんの二、三メートルの所ではたばたと水をかいていた。

水をかくと体がすーっと水の上に出がってくる。首を水の上に出すと沈んでいく。また、ばたばたとやると体が上がってくる。そして首が水の上に出ると再び沈む。そんなことを繰り返していた。

そこへ一本の丸太がすーっと出てきた。僕はそれにつかまった。やっと、

「溺れかかっていて、それを誰かが助けてくれたんだな」

と気づいた。見ると知らないお兄ちゃんが二人、僕の方を見ていた。そのうちの一人が丸太を押してくれたらしい。僕はすぐに『ありがとう』と言わなくてはならないと思ったが、始めてのことで急には言葉が出てこなかった。それで二人のお兄ちゃんの顔を見て、『にたっ』と笑った。お兄ちゃんはそれを見てどこかに行ってしまった。

その日のことなのか、もつと前のことなのかはつきりしないが、それも海でのことだった。父が僕を抱いて海に入れてくれた。僕は父の片腕に腰掛けて、

「おぶう、おぶう」

と幼児語をだして、はしゃいでいた。

僕の家がN町に引越する前は、T町で小さな印刷工場をやっていた。その工場から一里（四キロ）のところに中田島海岸があった。従業員の慰安のために、父は工場の従業員や家族を連れてよく中田島海岸に行った。そのときのことだろう。

N町に引越す前までは、僕たちは工場と同じ所に住んでいた。

印刷工場に『とりや』という運送屋が出入りしていた。運送屋のおやじが僕を見ると、

「子供はみんな満州に送って、鉄砲の弾にすることになっている。それで、お前を連れに来た」と言つて、怖がらせたらしい。僕はこれのおやじが来ると、

「帰れ、帰れ」

と言つて逃げ回り、押し入れの中に入ったり、机の脚にしがみついたりしたらしい。また、嘘つき、子供は鉄砲の弾なんかになるもんか」

と理屈を言つたらしい。子供にとっては恐ろしい話だったろうに全く覚えていない。これらは母の話である。

小学校一年生のときの春の遠足のことはちゃんと覚えている。

その日、全校生徒が運動場に並んで校長先生の話を聞いた。その話がすごく長かった。その校長先生の話が終わるとまた別の先生が長い話をした。僕は早く行きたくて、

「早く終わらないかなあ」

とそればかりを思っていた。

その長い話もやつと終わり、いよいよ出発となった。上級生からだつた。六年生、五年生、四年生、三年生、二年生と、次々に出て行つた。一年生の順番がくる迄がすごく長く感じられた。

二年生以上が全部出発してしまい、がらんとした運動場に一年生だけが残された。先生が、
「丸くなって座れ」

と言つた。それから、また先生の注意が長々と続いた。子供らは先生の注意などうわの空、ただ

早く行きたくてうずうずしていた。

うんと長く待たされた後、やっと出発した。行き先は頭蛇寺という寺である。殆どの子供らは、なんども遊びに行っていたから、この寺を知っていた。子供らは先生が連れて行く道が、自分らの行く道と違うのにすぐ気が付いた。

「もつと近い道があるのに」

などと言いながら歩いた。先生がわざと遠回りして行っても、頭蛇寺には十一時前に着いてしまった。家に帰ったのは一時過ぎで、またご飯を食べた。

中 田 島

僕の子供の頃、連れて行って貰った所といえば、中田島海岸ぐらいのものである。家の人や工場の従業員と一緒に、

「わい、わい」

言いながら、歩いて行つた。中田島までは一里（四キロ）あつたが、当時は一里や二里ぐらいの距離は歩くのが普通だったから、なんとも思わなかつた。僕らが歩く道を一時間に一本のバスが通つてゐた。道は地道だったから、バスが通ると砂ほこりで大変だった。

バスは中田島海岸の手前の川の橋のたもとの『なんでもや』のまえで止まつた。バスはここで乗客を全部降ろし、その先には行かなかつた。『なんでもや』はこの海岸唯一の設備で青い布地に氷と云う字が白抜きにした旗がひらひらしてゐた。手回しのかき氷を作る機械が置いてあつて、注文すると氷をかいてくれた。その他、食べ物や麦わら帽子や、泳ぐときに身に付ける簡単なふんどしなどを売つてゐた。僕らはここで休憩し、かき氷を買い、ついでにお弁当を食べさせてもらった。ここで食べないと、あと食べる所がなかつた。

川には木の橋がかかつてゐた。広重描く東海道五十三次にあるような橋である。それも何年も修理などしたことがないらしく、ところどころ橋板が腐つて落ちてゐるというありさまだった。バス

など通れつこなかった。この辺りは川幅が広く水量も豊富だった。橋板のすき間から水がとうとうと流れているのが見えた。川に落ちてしまうのではないかと、ひやひやしながら渡った。

この橋を渡ってすこし行くと、松林があった。太い松が川に平行に帯のように植えられていた。松林の向こうは砂地だった。さつまいもが植えられていたが、やせて小さい葉が少し付いているだけだった。その向こうにまた松林があった。この松林も前の松林と平行に帯のように連らなっていた。こちらの松は前の松に比べると大分細かった。

松林の向こうは砂丘である。この砂丘をよく見ると高い所に杭が打っており、竹や柴で作られた柵が砂丘の上に見えかくれしていた。その内側に松の苗が植えてあった。松の苗は半分以上が枯れ、虫食い状態になっていた。その根元付近には小さな草が生えていた。その雑草に花が咲いて可愛かった。

この海岸には面白い性質があった。砂丘に柵を作ると、そこに風で砂が吹寄せられて砂丘が成長する。その砂丘の内側に松の苗を植える。松はなかなか根付かないが、その内の何本かが根付き生長して、砂防林になる。そして、その内側を畑にする。ここではこうして土地を広げてきた。年に二メートルぐらいの割合で陸地が伸びると聞いた記憶がある。今は土地改良のため堤防が作られ、このようなことはないようだ。

この柵を越えると、自然にできた砂丘が幾重にも続いていた。砂丘は風で自然に姿かたちを変え。大きいもの、小さいもの、低いもの、高いもの、いろいろですばらしい。途中途切れる所もあるが、この砂丘は御前崎から伊良湖岬まで一二〇キロも続いている。

「女の寝たる姿や東山」

というが、京都の東山は緑の着物を着た婦人だが、こちらは裸で寝ている美しいスタイルの婦人だ。白い砂丘が美しい。

この広大な砂丘をときどき数人のグループが越えて行く。砂漠の中を点々と行く隊商のように見える。後に人の通った足跡の筋ができる。その足跡もやがて強い風で消されて、元のままの美しい風紋に帰る。

見ていると美しいが、越えるとなると大変だ。砂は大粒で乾ききっている。それが太陽の熱で熱せられて数十度にもなっている。ここに踏み入れれば、たちまちこの熱砂と戦わなくてはならない。ズック靴を履いていても、熱砂はズック靴の中にどんどん入ってくる。ズック靴は砂で浅くなり、砂に取られて脱げてしまう。脱げればたちまち熱砂だ。

「あつつ、あつつ」

と叫ばずにはいられない。僕の子供の頃はズック靴は高級で普段は下駄を履いていた。下駄は鼻緒だけで支えられているだけだから、すぐに脱げてしまう。脱げてしまえばズック靴と同じだ。熱くて耐えられない。下駄は歯が減ってなくなっている方が歩きやすかった。

ここの戦いは熱砂だけではない。風もまた強かった。大粒の砂塵の砂嵐が吹き交い、ともに目を開けていられない、目を手で覆い薄目にして歩く。着ているシャツやズボンはもちろん、幾重にも包んだ荷物の中にも砂は容赦なく入ってくる。弁当があれば砂でまぶされてしまう。そんな弁当はじゃりじゃりして、とても食べられなかった。

砂丘を越えてしまえば、砂浜は子供らにとって楽しいところだった。遠州難は波の荒いことで有名な所だ。小さい子供には波は巨大に見えた。まるで水の恐竜が襲いかかってくるように思えた。その水の恐竜が天上で崩れて子供らの方にやって来る。小さな子や女の子らは、

「きゃー、きゃー」

言いながら逃げ回った。男の子たちはわざと自分の下駄を落とし、波の中に飛び込んで拾った。子供たちは砂遊びが大好きだった。水際に大きなトンネルや築山を作ったり、波を上手に導いて堀やプールを作った。だが大きな波が来て流してしまった。

水際に小さな穴がたくさん開いていた。子供らは穴を見付けると、その穴に乾いた砂を注ぎ込んだ。そして、その砂を目印に穴を掘った。穴の底に五センチぐらいの蟹がいるのだ。この蟹を捕まえてゆでて食べた。美味しかった。

漁師のおじさんが、

「おい」

と呼ぶ。大人も子供もみんな、そちらの方に駆けていく。

漁師は地引き網を引いているのだが、大漁すぎて地引き網が動かないのである。網引きを手伝ってやった。獲れた魚がすごい。太さ二メートル、長さ三十メートルもある地引き網に魚がはちきれそうに詰まっている。網引きを手伝った人には獲れた魚をくれる。要領のよい人はちゃんと籠を持ってきていた。

僕は知らないから、大きければ良いと思い、太刀魚を二匹とった。それをずるずると引きずって歩いてきた記憶がある。もっとも子供で役に立っていないから相当だろう。

この広い海岸で、

「一・二、一・二」

とかけ声をかけながらグライダーの訓練をしている学生の姿が見られた。グライダーは飛行機と同じ形をしているが、プロペラやエンジンはない。グライダーに綱をつけ、一人が乗り、二十人ぐらいの人でひく。グライダーは空中に浮き上がると、綱が外され風に乗って飛んでいく。子供らはいっまでも見ていた。

やがて、この中田島海岸に立ち入りが禁止された。

お月見どろぼう

お月見というと懐かしい思い出がある。お月見どろぼうである。僕の育った地方では、「お月見のお供えものがなくなると、願いごとが叶う」と云われていた。それで子供らがお月見の供えものを盗っても、とがめだてはされなかった。

お月見が近づくと子供たちは急に忙しくなった。お月見のお供えものを盗るための道具を作らなくてはならないからだ。まず、適當の太さの柳かボプラの枝を切ってきて削り、一メートルか一・五メートルぐらい長さの持ちやすい棒を作った。

次にこの棒の先につける擬手を作る。この擬手の巧い下手が獲物の良し悪しに関ってくるから、子供らはいろいろと工夫をこらした。子供らは八番線ぐらいの太さの針金の先をヤスリで丁寧にとがらせ、棒に打ち付ける。次に針金の先を少し曲げて、釣り針のような返しを作った。三本脚の熊手のような擬手も作った。

当時はどこの家でもお月見をした。だがお月見の供えものといえば米の粉で作ったへそ団子、ふかしたさつま芋や里芋、枝つき的大豆をゆでたものが主であった。その他、果物として青いみかんか柿があるぐらいのものであった。

でも、お金持ちの家ではもっと豪華だった。例えばG織屋だ。M子ちゃんの家だ。M子ちゃんの